

「生きる」ことに関する一考察

山 本 典 子

1. はじめに

私たちは普段の生活の中では、自分が生きているということに関して、当たり前のように感じており、その意味や目的について特に考えたり、疑問に感じたりしていないことが多い。生きていること自体に何ら意識を向けなくても、日常生活を営むことは可能である。

しかし、思わぬ災難や喪失、挫折などに見舞われ、これまで当然のようにできていたはずのことができなくなったときや、その理不尽さが受け入れがなくなったときなどには、「生きる」ことに直面せざるをえなくなる場合もある。

あるいは、特に大きな困難や悩みはないのだけれど、なぜかすっきりしない、何かむなししいというときに、「生きがい」や「運命」といった言葉が頭のどこかにちらつきつつ、あえて何も考えまいと自分をごまかすかのように日常生活に邁進することもある。

「生きる」ということを意識しようとしまいと、私たちは生を受けてから生命尽きるまで、この世に生きている。生きる長さや生きざまは人それぞれである。生きる中では、運命、あるいは宿命ともいうべき不可避の事態もあるし、自分で選んで掴み取っていかなければならないことも、また、掴もうと努力しても到達することのできない目標もある。同じ時を生きていても、生きざまはその人にとって唯一無二のものであるといってもよからう。

人はみな、よりよく生きることを目指し、そのために意識して、または無意識のうちに様々な努力を重ねる存在であるといえよう。よりよく生きるということは、一般的には、より健康的に、より快適に、より長く、より充実した…といった言葉を充たさせることができると考えられるが、そのどの側面からも、なかなか満足のいくような結果が得られないため、人は生きる中で迷った

り、言いようのない不安や焦燥感に駆られたり、或いは、自分の存在意義に疑問を感じてしまったりすることもある。

それでも、人にはそういった苦しみを乗り越えて生きていく力がそなえられている。筆者は、拙稿「生きがいに関する一考察」（2015）にて、その原動力とも目標ともなる「生きがい」について論じた。本稿では、そもそも「生きる」とはどういうことなのかということについて考察を試みる。

II. 「生きる」ことへの気づき

サイエンスライターの柳澤桂子が

「いのちを見つめ、
いのちの尊さを思い、
私の道がみえてきた」

ということばを記している（2006, 69頁）。柳澤は、研究者としてこれからというときに病に倒れ、当初は原因不明ともいわれた進行性の手足の麻痺などの症状と闘いながら、生命科学の立場から「生命とは何か」ということについて様々な形で論じている。著作のあとがきの中で、「まだ気持ちが明るく、そのうちに治ると思っていた時期から、次第にこの重大さを認識して、助かる見込みはないと覚悟をきめるまで、そして最後にふたたび生きることになる喜び」（柳澤・赤, 1998, 75頁）と、病を得てからの自らの心の推移を綴っている。また、その変遷の中で至った心境であろうと推測される、

「私自身、何のためによりよく生きようとあがいているのかわからなくなりました。

でも、よく生きようと努力すること、

そのこと自体が私を支えてくれるのだということにも気づきました」

との記述もある（柳澤, 2006, 14頁）。病を得る前、研究活動に邁進していたときには、「生きること」、「いのち」といったことについて、あらためて思いをはせたり、その意味を深く追求したりする物理的な時間や、心の余裕がなかった、あるいは、その必要性を感じなかったものが、心身の苦しみに耐えな

がら自分の内面をじっと見つめるうちに、

「人間として生きた喜び。

そして、その喜びに気づいたこと。

それこそ、病気が私にもたらしてくれた最高の恵でした」

との思いに至ったというのである（柳澤，2006，40頁）。病そのものが苦しみであり、悲しみであることにはかわりはない。しかし、その苦しさ、悲しさを生き抜くことで、人はいのちの尊さに気づき、喜びを見出すことができる、とこの著者は語っているのではなからうか。

人間の苦しみは、病気だけではない。戦争やテロリズムといった争い、災害、貧困、孤独、差別、老い、人間関係における様々な問題、仕事や学業における悩み、将来に対する不安など、枚挙にいとまがない。私たちの生きる現代は、苦悩にみちあふれた時代ともいえる。そのような時代にあって、V.E.Franklは、生きる意味について問い、「苦悩」を人間の本質にとらえ、その苦悩をどう生きるか、ということを著書の中で様々な形で提示している。

梶川（2016）の指摘するように、避けがたい災いにただただ呻吟するだけなのは「フランク的な苦悩」の仕方ではない。それでは、自己中心的に苦悩を対象として見て、なすすべもなく苦しんでいるにすぎない。そうではなく、運命的な出来事を人生からの問いかけとしてとらえ、「逃げずに耐え抜く」姿勢をとるときに、人は「人間にできる最高の行ない」をもって「意味のある人生を送ることができる」のだと Frankl は言う（1947，42頁）。

苦悩には、自らの力で克服しうる苦悩と、不可避の運命ともいうべき苦悩とがある。前者の苦悩については、抗い、その本質を変容させようと努力することによって、人は自らを成長させることができる。後者の避けることのできない苦悩については、その意味を見出し、自らに引き受けることによって、「運命を内面的に克服することができる」と Frankl は言う（1984，129頁）。克服しうるか否かにかかわらず、苦悩を前にしたときに、ただその前に屈服するのではなく、苦悩から発せられている問いに応答することによってのみ、生きる意味が成就するといえるのではなからうか。「苦悩するとは、成し遂げること、

成長することおよび成熟することだけではなく、より豊かになることでもある…（中略）…これは人間が真理に向かって成熟していくということです」という Frankl の論（1984, 132 頁）は、「ふたたび生きる」べき「道」を見つけた後の柳澤の

「何か大きなものに

ふわりと柔らかく抱きかかえられるのを感じた。

その道はどこへ行くのかわからなかったが、

それを進めばよいことだけははっきりわかった」

という言葉（2006, 76 頁）に重ねて考えることができよう。理不尽ともいえる苦悩を決して是認するわけではなく、しかし自分の運命として受けとめ、応えることができたとき、本当の自分としてどう生きていくかという道が拓け、「何か大きなもの」に身をゆだねることができたということであろう。神谷（1980, 243 頁）が、苦悩の果てに「自我を超えた大きな力に統合され、またはこれに融合したと感じた」と述べているのも、同じような心境の表現であろうと考えられる。

この世に生を受けて生きるということは、最後には死という避けられない運命が約束されており、そこに至るまでも大小さまざまな苦悩の波が押し寄せてくるということである。それでも人が、ときには打ちのめされそうになりつつも、前を向いて着実に歩を進めて行けるのは、たとえ柳澤や神谷の前述のようなはっきりと言葉になるような気づきには至らなくとも、それぞれが生きるべき道を歩むという本来の営みを受け入れる力をもっているからといえるであろう。

次章では、筆者がインタビュー調査で出会った生体腎移植のレシピエント A さんの言葉をもとに、「生きる」ことについての考察を深めたい。

III. 移植患者 A さんの場合

筆者は、生体腎移植の患者およびその家族の心理的な援助体制の構築を目的として、関係者にインタビュー調査を行っている。レシピエント A さんには、

移植の約3か月前と、移植の約4か月後の2度にわたって、その体験についてなるべく自由に語ってもらう形で話をきいた。なお、Aさんからは、研究目的での情報の公開について了承を得ているが、プライバシー保護のために、事実の一部に改変を加えている。

事例中、「」内はAさんの発言、<>内は筆者の発言、『』内はその他の人物の発言を示す。また、移植をうけた年をX年とする。

1. 事例の概要とAさんの語り

Aさんは30代後半の男性。X-11年頃から糖尿病を患う。X-2年に急激に腎機能が低下し、X-1年に血液透析導入。仕事と透析の両立が体力的にも時間的にも難しくなり、透析導入とほぼ同時に大学卒業後勤めていた会社を退職し、現在は両親の営む自営業を手伝っている。X年に60代後半の母親から腎臓を移植し、現在に至る。家族は他に父親と既婚の兄妹がいる。Aさんは両親の家から「車で20分」ほどの場所に一人暮らしをしている。

① 移植3か月前のAさんの語り

X-2年のある日起きたら目が見えなくなっており、急きょ入院。手術をして目は見えるようになったが、医師から腎機能が急激に低下しており、近い将来透析が必要になること、また、透析よりも移植が望ましいことを告げられた。糖尿病を患った時点から「ちゃんと自己管理をしてれば、そこで踏み留まれたのに、それをしなかったから、こう追いつめられて。でも、病気に教えてもらうことも結構ある。言ってもわからないと叩かれるのと同じで、病気ってものは体罰に近いものがある。おかげで闘病という形だけど、規則正しい生活とか自分に厳しくすることは大事だってことがわかった。そういうプラス思考なので、病気に飲み込まれることはないです」。

X-1年の透析導入時の医師との面接に両親が同席した際に移植の話が医師から出されたところ、母親が腎提供を申し出てくれ、1年後に移植を目指すこととなった。母親に理由を尋ねると、「子どもに（腎臓を）あげるのは当然」との答えが返ってきた。そうであるならば、「自分の中には母の一部が生きている」のだから、「母に万一のことがあった場合にも、自分が犠牲に

なるのはむしろ罪」。母親の「恩に報いる」ためには、母親がしてくれたのと同じように「次の世代に何かを残すべき」なので、母親に孫の顔を見せたい。移植にあたっての唯一の懸念は、兄と妹が母親のことを心配して移植に反対したこと。現在（移植3か月前）は「消極的賛成の状態にまで」なっているが、今後もし母親が他の原因で亡くなったとしても、兄と妹が腎提供のせいにするのではないかという懸念がある。

移植が成功したら、「まずは食事制限を気にせず、楽しみたい」。現在は、家族や同僚らと食事をする、Aさん本人は「食べられないこと、飲めないことをさほど気にせず、楽しく喋ってる」つもりでも、周囲が気を遣い、次第に誘われなくなったり、また、自分も出かけていくのが億劫になったりしている。「透析してる人間がいるだけで、周りがこんなにぎくしゃくするのか」と思い知った。

Aさんは数年前からブログを書いている。当初は「半分遺書のつもり」で始めたブログであるが、同じく腎臓を患う読者が数十名、更新を待っており、様々な書き込みがなされていることを思うと、「後に続く人に自分にできることを伝えようという責任感と、（ブログを元に）本かけるんじゃないの？というプラスの考えが出てきた」。ここに至るまで、「はじめは暗いこと書いてて、そのうち、これは恰好悪いなと思って、いいことばかり書いて…。でも、いいことばかりって、そんな毎日ないんで、辛いこととか、心の闇をかき出すしかなくなってきて、こんなんでもいいんかと思ったり…」といった逡巡もあった。しかし、「昔は教会に行って神父に言わなあかんかったんちゃうかな」ということを、ブログでは「名前も顔もわからんところで、お互い遠慮なく言い合える」という意味で、「ブログを上手く使ってる」。

あとは移植の日を待つばかり。医師を信頼しており、特に不安はない。

病気になることで、「自分を大切に思っている誰かがいるということ」、「人間は一人で生きているようだけど、結局は誰かに生かされているということ」に気付かされた。「自分に火の粉がふりかかるのとふりかから

ないのとでは全然違いますから」。

② 移植4か月後のAさんの語り

インタビューの第一声が「移植は思ったより大変でした」。移植後の尿の出が悪く、移植後すぐに再手術を受けた。「自分の痛みとかつらさとかっていうよりも、せつかく、母が提供してくれた、その思いが無になるのだけはちょっとつらいなっていう、母に対する気遣いとか、母の努力が水の泡になるんじゃないかっていう心配が強かった」。

現在は検査の数値的にはかなり安定している。しかし、「(免疫抑制剤のために)免疫が落ちてるっていうのもあるんで、自分を守ることに對して、精神的にもやっぱりナーバスになってるっていうのはわかります。電車乗るっていうことに対する意識も、前とは違って、もうそれこそね、原子炉に近づくような緊張感」。<電車でたくさんの人と接することが心配?>「うん。気分的には完全防護で入らなあかんみたいな感じなんですけど、実際、マスク一個つけてるだけで。移植してからは、なんか、すごい、こう、身体の中に守らなきゃいけないものがあるっていう意識が強くなりますね」。

移植直前に母親に後悔しないかということを確認に行き、『自分にとって一番の幸せだ』という返事もらった。しかし、移植手術が無事終わり、「今までためらってたものが、実際に行われてしまったので、その分、上乘せして自分の人生をもっと上向きにもっていかないと、提供してくれた母に申し訳ないし、長い時間、世話してくれた病院のスタッフの人たちの思いとか、努力っていうのを無駄にしちゃいけないとかっていう、いろんなものを背負ったという意識はあります。とりあえず1つ壁は越えたけれど、ここから先は新しい課題を自分に課さなきゃいけないみたいなプレッシャーとの闘い」。兄と妹からは移植前に、『ここまできたらしょうがない』という「一応の同意」を得ることができたが、『『しょうがない』という言葉の裏に不同意を感じる』。母親に万一のことがあった場合に、兄や妹から「責められる」とつらいので、母親のことは「ちゃんと最後まで責任をもってみなきゃいけ

ないって意識」がある。

移植を行って、病院に頻繁に通う必要がなくなった「開放感」と、病院から離れている間に何か起こらないかという「不安」の両方の「せめぎあい」。「今は通院するわずらわしさよりは、病院でまめにチェックして、何かあったときは早く判明してセーブしたいっていうほうが強い」。

このように、様々な不安を抱えているが、移植前に比べると、移植後の生活などについて書かれた書籍やブログなどの「情報ソース」が殆ど見当たらず、「自分が手さぐりで生きていくしかないのかな」。<病院で情報は得られない？>医師には「漠然とした疑問はぶつけにくい」。病院で出会う他の患者とは「同病相哀れむというのは避けたいので、仲良くなりたいとは思わない」し、「同じ境遇の人のサンプルデータはあてにならない」。<Aさんご自身のブログは？>「続けてますよ。1日に200アクセス以上あることもある。自分が足跡をつけたところで向こうが安心するのなら（ブログを続ける甲斐がある）。今まではみんなが踏み分けた道を自分も歩くことができたけど、移植後はそこを歩いた人が少ないから思ったより大変。自分で草を刈って自分で道を作らなきゃいけない。俺は俺の道に、自分で答えを見つけないきゃなって」。

移植後の生活は「思ったほど自由じゃない」。「自分の健康状態に自信が持てないし、いつまで、こういう生活ができるのかなって、人生に安定感を感じられないので、ドミノが倒れるみたいな感じで、マイナス思考がはじまりそうなときもある」。そんなときに、医師や看護師から『もっと前向きに生きなきゃ。まだまだ恋なんかもできますよ』などと励まされるが、「じゃあお前は俺を（恋愛の）対象として見られるのか？ってききたくなる。できないだろ。病人とか障がい者だとか思うだろって。そんな励ましは、移植して治っても、100%元には戻れないってことを再認識することにつながるんだよ」。

「これは人生のことですけど、悩みって1つ解決したら、別の次元の悩みができるのと一緒に、移植したらしたで、守らなきゃいけない努力とか、自

分の環境をメンテナンスしなきゃいけない気配りっていうか、例えば、免疫抑制剤を1回忘れたけど、まあいいやっていう感じじゃなくなってくる。そのへん、胃薬とか風邪薬を飲み忘れたっていう次元じゃないってのがあってね…。生きるって難しいです。

〈移植してご自身に何か変化はあったと思われますか？〉の問いには、「ありました」と断言。「一言で言うと、慎重になりました。軽はずみなこと、不注意、つまらないミスを罪だと思うようになりました。だから、よく言えば、自分に厳しく前向きになったんですけど、その弊害として、人にも厳しくなって、ルーズな人を寄せ付けなくなったところがあるんです。頼むから私には何も害を及ぼさないでねって。守りに入って、ナーバスになってるんですかね。(中略) 人生の精算は、最後にピリオドを打ってから評価が決まるけど、今は暫定的にちょっとマイナスかな」。

2. 事例の考察

Aさんの移植前と移植後と比較すると、移植後、AさんのQOLや腎機能のデータ値は改善され、安定しているにもかかわらず、Aさんの語りは、Aさん自らの語りにも直接的な言葉であらわされているように、「プラス思考」的な調子から「マイナス思考」的な調子に転じており、「生きるって難しい」とさえ言わしめている。移植をはさみ、Aさんに何があったのだろうか。

まずは、移植前のAさんの状態についての考察を試みる。

① 移植前のAさんについての考察

X-11年頃から糖尿病を患っていたAさんであるが、「自己管理」ができず、X-2年に「体罰に近い」形で腎機能が急激に悪化し、透析或いは移植の必要性を宣告されてはじめて「規則正しい生活」や「自分に厳しくすること」の重要性や、「自分を大切に思ってくれている誰かがいるということ」に気づくことができた、と病気を「プラス思考」でとらえることができたと話している。

しかし、その境地に至るまでには、ブログに「暗いこと」、「いいこと」、

「辛いこと」、「心の闇」など様々な心の様相を書き連ねるなどの「逡巡」があった。これは前出の柳澤が病を得てから、ことの重大性を悟り、助かる見込みがないとの覚悟を決め、最後に「ふたたび生きることになる喜び」を感じて至るまでの心の推移（柳澤・赤，1998, 75頁）と似た経路を辿っているように考えられる。

かつてはブログを書くことが、Aさんにとって「神父」に告解する行為と同じく、心の平安を得て生きるための行為であったものが、今ではAさん自身が「ブログの更新を待っている」人たちの「神父」の役割を果たすまでになっている。病気によってもたらされた「誰かに生かされていること」への気づきが、Aさんを更に、自分も「後続く人に自分のできることを伝えようという責任感」に導いたものともとらえられる。他者から必要とされることは、自分の存在意義の実感へとつながり、それが生きて行く上での心の支え、生きる意味ともなり得る。

筆者は拙稿（2015）にて、自分に与えられた運命を誠実に受けとめ、うちに秘められた生きがいからの声に気づき、応えていくことが、人間が人間らしく生きて行くうえで重要であるということを論じた。Aさんも、「踏み留まる」ことができなかったという後悔の残る闘病生活の中で、母親からの腎移植という光明が見出され、「プラス思考」の波に乗れたところで、運命を受けとめ、自分なりの生きがいを見出すことができたものと考えられる。

「あとは移植の日を待つばかり」で特に不安はない、と達観したような表情を見せるAさんには、少々過剰適応のような感もある。その裏には、兄妹の「消極的賛成」や、ドナーとなってくれる母親への思いなどのAさんの複雑な苦悩が抑圧されていると考えられ、この後の展開によっては、抑圧された不安定要素が一気に火を噴く可能性をも秘めていることを、治療者側は把握しておきたいものである。

② 移植後のAさんについての考察

移植後、尿の出が悪く再手術を要したという思わぬトラブルはあったもの

の、その後の身体的な経過は良好で、客観的には QOL も向上しているはずではあるが、A さんは「自分の健康に自信が持て」ず、「ナーバス」で、「マイナス」の状態にある。

Frankl は、人間の心は『『重荷』を担うことでかえってしっかりする』ということ、強制収容所からの釈放で突然重圧から解放された囚人が心の危険にさらされるという話を用いて説明している（1947, 138 頁）。A さんも、通院のわずらわしさから解放され、却って病院から離れることによる不安が大きくなったということを述べている。また、移植前には、食事制限を気にせず家族や同僚との食事を楽しみたいと語っていたのに、移植後は人との触れ合いに「原子炉に近づくような緊張感」に苛まれ、「頼むから私には何も害を及ぼさないでね」と人を寄せ付けず、「守りに入っている」。免疫抑制剤を服用していることによる感染症への対策という意味合いも含まれているであろうが、理由はそれだけではなさそうである。

普段は淡々と落ち着いて話す A さんが語気を荒げたのが、医師や看護師からの励ましに対する、「じゃあお前は俺を（恋愛の）対象として見られるのか？…（中略）…病人とか障がい者だとか思うだろって。そんな励ましは、移植して治っても、100%元には戻れないってことを再認識することにつながるんだよ」との心の叫びを吐露したくだりである。A さんは糖尿病を患って以来、2 年前に透析の宣告を受けるなどの衝撃を味わいながら、11 年かけて、自分が病人であるという苦悩を一旦は引き受け、生きる道を見出していたものと考えられる。A さんはここまでの道のりは「みんなが踏み分けた道」であり、自分も安心して歩くことができたと言っている。しかし、移植という新しい道を歩き始めてみると、移植後の生活などに関する「情報ソース」が見出せず、「自分で草を刈って自分で道を作らなきゃいけない」前途に自信が持てずにいる様子である。移植前とは違うけれども、「思ったほど自由じゃない」、他人からは「病人とか障がい者」と思われるような、100%元には戻れていない自分の現在の状態を、A さん自身、まだ受け入れることができていない。

このような状態のときに、母親に「万一のこと」があったり、それに対して兄妹から非難されたり、ということがあれば、「ドミノが倒れるみたい」にマイナス思考の連鎖にとらわれてしまう危険性がある。

しかし、Aさんは「俺は俺の道に、自分で答えを見つけなきゃな」と言い、前出の柳澤の言葉でいうところの「何か大きなものに ふわりと柔らかく抱きかかえられる」（2006, 76 頁）境地にはまだ至ってはいないものの、自らがこれから進んでゆくべき道に答えていく準備中であることが示唆されている。

IV. まとめ

人生には、苦痛や苦悩を感じざるを得ない局面が幾度となくある。予想もしなかった運命が、ときに理不尽としか思えないような形で、私たちの生きる道の途上に立ち塞がることもある。目標を達成したときや、苦難を1つ乗り越えたと思ったとき、すぐまた新たな苦痛が襲いかかってくることもある。

どうしても抗うことのできないような苦悩の重圧に喘ぐとき、人は自らの生きる意味を求めようとする。立ちはだかる障壁の大きさに立ちすくんでしまって答えがだせなかったり、やっと導き出した答えに納得がいかなかったりして、自分の生きる意味や価値が見いだせなくなると、人は未来への展望がもてなくなり、過去にこだわったり、或いはただただ自らの運命の理不尽さを呪ったりすることで、説明のつかない苦悩をなんとか埋め合わせようとする。

しかし、このようなときに必要とされるのは、「生命の意味についての観点の変更」であると Frankl は言う。人間が「人生から何を期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである」（1977, 184 頁）。すなわち、人間自らが自己を中心にして人生を問うのではなく、人生から自己を問うという、人生観の転回が必要とされている。また、Frankl は、

「生きるとは、問われていること、答えること
——自分自身の人生に責任をもつことである」（1947, 57 頁）

とも言っている。

過去の出来事や未来の死など、変えることのできない運命もある。しかし、それらも含めて自らに与えられ、問われているものを、どのように受け止め、どのように答えていくのかということに、歩んでいくべき道がどう示され、これから意味のある人生をどう生きていくのかということがかかっている。

人間は病気や移植といった危機的な状況にのみ、その生き方を問われているのではなく、人生のあらゆる局面で、時々刻々と様々な選択を迫られ、生きざまを問われている。その問いかけに対して、ときには問い返し、自らの運命に何らかの意味づけや価値判断を加えることも必要になろう。しかし、自らが、自らを越える大いなるものから問われる存在であり、その力の中で問いかけに答えながら、ただ生かされていることもまた、自らの人生に責任をもって生きることといえる。

「魂の道の果てに立ちませる永遠なるものを神と呼ばんか」（柳澤・赤，2006, 68頁）

不治の病と思われていた病に治療の道が開け、「ふたたび生きることになった」柳澤の短歌である。人間の機知をこえた、「神」ともいえるような「何か大きなもの」の力を感じ、答えることで、与えられた運命を生き抜くことが、「生きる」ということだと結論づけることができると考える。

付記：関係者のプライバシー保護の観点から、本稿中の事例の引用は差し控えてください。

V. 参考文献

- Frankl, V.E. 1947. “…Trotzdem Ja zum Leben sagen” 山田邦男、松田美佳訳『それでも人生にイエスと言う』春秋社 1993.
- Frankl, V.E. 1977. “Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager”, … trotzdem Ja zum Leben sagen. 池田香代子訳『夜と霧』みすず書房 2002.

- Frankl, V.E. 1984. "Homo Patiens: Versuch einer Pathodizee." In *Der leidende Mensch: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie*. 山田邦男、松田美佳訳 『苦悩する人間』 春秋社 2004.
- Frankl, V.E., Kreuzer, F. 1986. "Im Anfang war der Sinn—Von der Psychoanalyse zur Logotherapie". 山田邦男、松田美佳訳 『宿命を超えて、自己をこえて』 春秋社 1997.
- 梶川哲司. 2014. 「『それでも人生にイエスと言う』をめぐって ～神谷美恵子の生きがい論を手がかりに」 フランクル研究会発表
- 梶川哲司. 2016. 「『それでも人生にイエスと言う』の「I 生きる意味と価値」を読んで」 フランクル研究会発表
- 神谷美恵子. 1980. 『生きがいについて』 神谷美恵子著作集1 みすず書房 (注: 初出は1966年)
- 神谷美恵子. 2014. 『人間をみつめて』 河出書房 (注: 初出は1974年)
- 山田邦男. 1993. 「解説 フランクルの実存思想」. Frankl, V.E. 『それでも人生にイエスと言う』 春秋社, pp.163-217.
- 山田邦男. 1999. 『生きる意味への問い——V・E・フランクルをめぐって』 佼成出版社
- 山田邦男. 2002. 「現代の精神状況とその超克——フランクルを手がかりとして」 山田邦男編 『フランクルを学ぶ人のために』 世界思想社, pp.290-349.
- 山本典子. 2010. 「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察 —グリムのおとぎ話『七羽のからす』をとおして—」 『Humanitas』 Vol.35, pp.39-49.
- 山本典子, 高原史郎. 2010a. 「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察 I 腎提供という体験」 『今日の移植』 Vol.23, pp.157-162.
- 山本典子, 高原史郎. 2010b. 「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察 II 腎提供という体験」 『今日の移植』 Vol.23, pp.277-282.
- 山本典子. 2011. 「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察 —

- C.G.Jung 『ヨブへの答え』をとおしてー 『Humanitas』 Vol.36, pp.23-33.
- 山本典子. 2012. 「医療の現場における臨床心理学の研究について ー生体腎移植に関する研究における一考察ー」 『Humanitas』 Vol.37, pp.39-52.
- 山本典子. 2014. 「生体腎移植のドナーが『イエス』と言うとき ー Viktor E. Frankl 『それでも人生にイエスと言う』を援用してー」 『Humanitas』 Vol.39, pp.21-34.
- 山本典子. 2015. 「生きがいに関する一考察」 『Humanitas』 Vol.40, pp.21-35.
- 柳澤桂子, 赤勘兵衛. 1998. 『冬樹々のいのち』 精興社
- 柳澤桂子. 2006. 『いのちのことば』 集英社

(奈良県立医科大学非常勤講師・心理学)